

## 皆吉爽雨の俳句観

日野雅之

皆吉爽雨

俳人、皆吉爽雨の生涯を俳文学大辞典（平成七年十月二十七日・発行社角川書店刊）から引用する。

皆吉爽雨 俳人。明治三五・二・七、昭和五八・

六・二九、八一歳。福井県生まれ。本名、大太郎。

大正八年、福井中学卒。大阪の住友電線製造所に入社。上司の大橋桜坡子（おうはし）の教導を受け、『ホトトギス』に投句、高浜虚子の教えを受ける。

同一年、関西の『ホトトギス』作家とともに『山茶花』を創刊、編集責任者となる。昭和一年、野村泊月が『山茶花』選者を辞退、桜坡子・森川暁水とともに選者となり、同一九年の終刊まで選者と編集責任者を務めた。同二〇年、東京に転勤し、杉並区に移住。同二一年、『雪解』を創刊主宰。同二四年、住友を退社し、句作に専念。同二六年、武蔵野市に転住。同四二年、第一回蛇笏（だこつ）賞受賞。

同五三年、俳人協会副会長に就任。同五四年、勲四等旭日章を受章した。同五八年一月、不審火の厄に遭う。同年六月、急逝。法名、華嚴院爽雨大玄居士。東京の深大寺墓地に葬る。句風は客観写生を貫き、初期の自然諷詠から、のち優美・枯淡の境地に進んだ。句集『雪解』（昭13）『寒林』（昭15）『雲板』（昭19）『緑蔭』（昭22）『たかし・爽雨互選句集』（昭23）『寒柝』（昭26）『遅日』（昭27）『雁列』（昭30）『三露』（昭41）『泉聲』（昭47）『花幽』（昭51）『聲遠』（昭57）『皆吉爽雨遺句集』（昭63）、著作『花鳥開眼』（昭17）『句ごころ（昭23）』『句ごころ』（昭23）『句作一路』（昭33）『俳文四季』（昭43）『句のある自伝』（昭45）『近世秀句』（昭45）『山茶花物語』（昭51）『皆吉爽雨著作集』（全五巻、昭54）（筆者注・サンケイ新聞発刊五

十周年記念事業・爽雨はサンケイ俳壇選者であった。『俳句開眼』（昭56）ほか。句「もみじ散る一樹もて黄にくれなるに」「初蝶の失せて濃かりし影のごと」「浦野芳南」以上である。

皆吉家の祖は九州延岡藩士で、藩主有馬清純が徳川綱吉の代に越後糸魚川に移封され更に三年後丸岡に移封され皆吉家は家老に次ぐ重職にあった。父、五郎は任官して各県を歴任、明治三十七年から故郷の福井県丸岡町の町長を八年間勤めた。後に武士の商法で失敗し、福井中学から金沢四高への進学を断念せざるを得なかった。同窓で早稲田大学文学部教授となった岡一男は中学時代の回想で述べている。「一緒に回覧雑誌をやった仲間に皆吉君が居て、その頃から文章に秀で雋（しゅん）秀な感じのする美少年で大太郎という愛嬌のある名が級友に親しまれていた。成績は中野重治と共に抜群であった。」家を助けるために住友電線製造所（現在の住友電気工業社）に入社した。上阪したのは大正八年十七歳の時であった。入社して販売係となり、上司は大橋英次で櫻坡子（おうはし）という俳号を持った俳人であった。社内俳句会を指導し、「ホトトギス」に投句していた。皆吉大太郎も俳句を勧められ、俳号を爽雨と命名してくれた。「ホトトギス」に投句を始めた。爽雨の父、五郎も五浪という俳号で俳句をたしなんでいた。①住友——大橋櫻坡子——俳句——ホトトギス——虚子という出会いが皆

吉爽雨を大成させたのである。

住友という会社については、司馬遼太郎の、その著『この国のかたち』の「会社の『公』」という章で紹介している。

歌人川田順（一八八二—一九六六）のことである。この人については、その晩年、透けたような瘦身の人になってから私は面識をえた。

昭和三十年ごろに会った川田順翁は、住友の常務理事時代、社員たちにとって、廊下を歩く靴音さえおそろしかったという面はもはやうかがえず、「老いらくの恋」を遂げえたさなかで、ときどき少年のような笑顔をみせ、会っている私まで仕合わせな気分にした。（中略）

昭和二十六年刊のこの人の著書『住友回想録』（中央公論社）によると、当時、この会社は薄給だったという。「見わたすところ、住友人には金持ちが一人としてゐない。実業界としてはおどろくべき清貧ぶりである。」と、じつにいさぎよい文章で書かれたくだりがある。

その理由の一つは「無い袖は振れなかったといふこと」だそうである。

もう一つは、鈴木（馬左也）総理事の人生観が薄給主義で、「若い者達に金を持たせるのはよろしくない」という親切な老婆心からだったという。

とても、私企業の総帥とはおもえない思想である。

この鈴木という人は、住友の伝統的社是である「公益を先にし、私利を後にすべし」ということばをつねに口にしていたそうである。このため、ビジネスマンのとしての鍛練の方はしばしばおろそかになつた、という旨の文章がつづく。

右は、明治・大正の住友である。さらに、同書は、そのころのこととして、以下のようにも言う。

……住友には擦れつ枯らしや悪党はあなかつた。気風は清潔であつた。だから船場島之内（註・大阪の古い商家のまち）の金持ち連は住友社員を聲（むこ）にしたがつた。

さきに、明治の博多の商家の旦那衆が、福岡旧城下の没落士族に娘をやりがつたと書いたが、川田順の時代は、もはや士族の存在はないにひとしい。

そのかわりに、たとえば住友がある、と理解したい。ともかくも、大正の大阪土着の富商たちは、「薄給」の住友社員を婿にとおもつたのである。こういう現象は、おそらく日本独自のものに相違ない。

「この国のかたち 二」（一九九〇年九月一五日・文藝春秋刊）の「会社的『公』」の章から引用した。

歌人、川田順も住友であるが、俳人、山口誓子、小説家、源氏鶏太も住友である。文学を大事にする社風があ

つたかもしれない。住友で上司に恵まれた爽雨は、四高に進学するよりも良き運命に遭遇したのかもしれない。昭和三十六年九月号の『文芸春秋』口絵写真の「同級生交歓」は大正八年の福井中学卒業の同級生四人である。作家、中野重治、法務大臣、植木庚子郎、日活常務、江森清樹郎、俳人、皆吉爽雨である。

大正九年、二十歳の折りには、高浜虚子選の国民新聞、ホトトギス雑誌に初入選した。大正十一年には京大在学中の日野草城の来訪を受けはじめて会つた。その年、関西のホトトギス俳人を中心とした俳誌「山茶花」が創刊され編集を担当する一人となつた。昭和十一年、三十四歳の折りには、先輩の大橋櫻坡子と共に「山茶花」三人の選者の一人となつた。十三年、三十六歳の折りには、第一句集『雪解』を虚子の序、櫻坡子の跋で上梓した。十九年、戦時下の俳誌統合により廃刊となつた。二十年末には東京転勤となつた。このころ、虚子から「ホトトギス」の編集を頼まれていたが、自分で俳誌発行の企画を抱いていたので断ることになつた。

昭和二十一年、四十四歳の折りには、皆吉爽雨主宰の俳誌「雪解」が創刊された。二十四年、四十七歳の折りには、満三十年勤務の住友電気工業を退職して、『雪解』誌主宰に専念することになつた。翌年からサンケイ新聞の俳壇選者を担当、終生つとめることになつた。

昭和四十二年、六十五歳の一月には、宮中歌会始を陪聴する機会が与えられた。侍従長、入江相政の姪の入江

朝子が雪解同人であった関係かもしれない。爽雨が逝去した時の角川書店発行の俳句雑誌「俳句」の「皆吉爽雨追悼号」には爽雨俳句を鑑賞しながら入江相政が追悼文を寄せている。

この年の六月、爽雨は第一回蛇笏賞を受賞した。飯田蛇笏を記念して、その年、最も活躍した俳人に贈られる賞で角川書店が設定したが、前年刊行の第八句集『三露』が対象句集となった。同じ写生を主張して交流のあった歌人、吉野秀雄も短歌の遙空賞に輝き、爽雨にとっては二重の喜びであった。受賞記念講演者は、爽雨の関西の二十代からの俳句を見守り続けた俳人、水原秋櫻子であった。爽雨の句業を讃えた。角川源義は富山県の生まれ、隣の福井県生まれである爽雨に大変好意的であり、正岡子規直系のような客観写生の俳句を高く評価していた。すべてのことに地味である爽雨に弟子の赤松恵子（婚家先の赤松家は周南市の徳応寺を守っている。与謝野鉄幹の兄の寺であり、鉄幹が赤松家に住んでいたこともある。）は「もつとマスコミに出て欲しい。」と地団駄踏んでいたが、角川源義の肝入りには赤松恵子も快哉を叫んだことであろう。角川源義が次女真理さんを見つけた時に傷心の旅に隠岐を勧めたのが爽雨であろうと思う。隠岐の雪解人たちが角川源義一行を歓待したことは、前号の「島大國文」の掲載のとおりである。

昭和五十三年、七十六歳の二月には、俳人協会副会長に就任した。昭和五十八年六月、心不全で逝去、八十一

歳であった。六十代後半からの爽雨の句業について、俳人、草間時彦は次のように評している。「既に枯淡の境地に入り、格調の高さ、流麗と言われた頃に比べると、写生に立脚しつつそれを越えたもつと深いものに到達している。」阿波野青畝は爽雨を「山部赤人型の俳人」と言っている。

爽雨俳句を評してみることにする。

ゆく雁やふたたび声すはろけくも

昭和十三年頃の作。まさに阿波野青畝の言うところの「山部赤人型の俳人」のスケールの大きい自然詠の真骨頂である。大空を帰る雁の姿をとらえ、声を一度聞いたあと、またはるか向こうで声を聞いたという。「はろけくも」という措辞が雄大な感じを出している。

この句は大岡信の「折々の歌」にも掲載されている。「爽雨は虚子の唱えた写生俳句の精髓をさぐって独自の世界を作り上げた俳人である。一語一語の語感をいっくしむ作風で、おのずと優美な句境が生み出された。」②と爽雨を評している。

白樺のまれにはななめ秋晴るる

昭和十六年の作。志賀高原での句である。「まれにはななめ」という中七の発見。そして、ひらがなを用いて流れるような「しらべ」が、優美な雰囲気醸し出し

ている俳句である。大岡信の言う「一語一語の語感をい  
つくしむ作風」が、のちに爽雨独自の品格ある句風を生  
み出していったのである。

麦笛やおのが吹きつつ遠音とも

かつての田舎では子どもたちが麦笛を吹いているのを  
よく見かけたものであるが、最近はまれである。自分で  
吹いていながら、遠音かなと錯覚を起こす、あることで  
あろう。このような繊細な感覚も爽雨の持ち味の一つで  
ある。

女湯も一人の音の山の秋

昭和二十三年の作。「女湯も」で男湯も我ひとりとな  
る。そしてな行の「の」という措辞が三つも流れるよ  
うに続く。「滝の音は絶えて久しくぬれど名こそ流  
れてなほ聞こえけれ」藤原公任の百人一首の歌であるが、  
た行が二つ続いて、滝の強さを表し、な行が三つ続いて  
流れる感じを出していると言われるが、爽雨俳句も大岡  
信が評しているように言葉の運び方が繊細である。

そしてまた、昨今の俳人の俳句にしても、講演にして  
も、品性という面において、欠ける感じの俳人が多く見  
受けられて残念である。「女湯」という艶っぽい言葉で  
はあるが、爽雨俳句には俗っぽい感じがみじんも見られ  
ない。品性が性格にも俳句にも備わっているのである。

炉話にちちと起きあるおとしり 罔かな

炉話という冬の季語だけで、昔懐かしい雰囲気を思わ  
せるが、炉話をしていたがゆえに、そばで眠っていた籠  
の罔の小鳥が起きてきたという。山中の茅葺きの家の炉  
であろうか、「炉話」「罔」と野趣溢れる世界を巧みに  
表現している。

鴨の陣ただきらきらとなることも

「近江雄琴温泉」と前書きがある。琵琶湖の鴨の陣が  
太陽光の具合によって、「ただきらきらとなる」という  
爽雨の写生俳句は素直にそのまま観（み）るということ  
を大切にしている。みたままを素直に表現するというこ  
とも、至難の技であるが、爽雨俳句は敢えてそれに挑戦  
しているのである。同じ発想の句に「雀飛ぶそれも光芒  
日向ぼこ」もある。

町並も木々はむさし野鳥雲に

「鳥雲に」「鳥帰る」春の季語である。かつての武蔵  
野に町が出来ているという。町は都会的になつているが  
町中にある大きな木々は、かつての武蔵野の面影を残し  
ていることに気づいた作者、ここでも「も」という助詞  
がうまく使われ、そして、「木々はむさし野」という表  
現を産みだしたところが、徹底写生の爽雨の独自の世界  
が開かれている。

落花まだ花のはざまにあそぶほど

昭和十五年の作。桜の俳句で有名なのは「まさをなる空よりしだれざくらかな 富安 風生」がある。落花の情景を「花のはざまにあそぶ」と表現した写生の確かさと観察力の鋭さが光る俳句である。虚子が主導した「ホトトギス」俳句は客観写生を追求したのであるが、高野素十の「おほばこの芽や大小の葉三つ」の句などを日野草城、水原秋櫻子、山口誓子らは、「草の芽俳句」「木一草俳句」と称して、もっと浪漫あふれる句風を追求しようとしていた。「白樺に月照りつつも馬柵の霧 秋櫻子」「きつつきや落葉をいそぐ牧の木々 秋櫻子」などの俳句を発表していた水原秋櫻子は「ホトトギス」を脱退した。このへんの事情は田辺聖子の「花衣ぬぐやまつはる・・・」という俳人、杉田久女をテーマにした小説を読むとわかりやすい。

又すでに親交を得た日野草城のほかに、大正十五年同じ住友系に入社した山口誓子や阿波野青畝とも交流を深め、新鋭俳人等と句作談論が盛んになるにしたがって「写生」こそわが道で時流ののって写生を見失う事がないようにと自らを戒めている。

爽雨は二十歳の頃から披講の名手であったが、東西ホトトギス俳人の交流で爽雨の披講を聞いた水原秋櫻子は、俳句にも注目してはるか東京から爽雨を見守る一人となった。③

と昭和俳句文学アルバム「皆吉爽雨の世界」にあるが、爽雨の著書「写生句作法」の中で次のような文章を書いている。「そうした座の中にあつて、私は出来るだけ胸を張り、肩をいからせた。ひそかな私の反抗の姿勢である。叙情の激流、感覺の香氣、こうしたものになじむまい、押し流されまいと身構えたのである。即ちここでも、写生ということ客観ということを見失うまいと、それらにしがみつきながら抵抗しつづけたのである。」昭和三年から日野草城らと無名会という実作勉強の会を開いていたのである。「草の芽俳句」を脱退した水原秋櫻子ではあつたが、同じ「草の芽俳句」仲間と見られる爽雨に対して注目していたということは、爽雨俳句の中に「草の芽俳句」以上のものを感じ取っていたのかも知れない。蛇笏賞受賞式記念講演の講師がホトトギスを脱退した俳人であつたということは注目すべきことである。

汗引いて山河やうやく故里ぞ

「福井に帰省」という前書きがある。「山部赤人型俳人」を思わせる俳句である。

爽雨は会社の通勤に一時間半もかかるのを利用して、往復の電車で歌集、歌論、隨筆集を読むのが楽しみだった。句集よりも歌集に写生の心を探究してアララギ派歌人を愛し、殊に島木赤彦を畏敬した。④

大岡信著の「第五 折々のうた」の「雪だるま星のおしやべりべちやくちやと 松本たかし」の項に「昭和二十三年一月、越後湯沢温泉滞在中の作。同行者は親友の歌人吉野秀雄や俳人皆吉爽雨ほか数人。」とある。松本たかしは代々江戸幕府所属であった宝生流能役者の家に生まれた。ホトトギスでは「東のたかし、西の爽雨」と呼ばれた時代があった。

とつつぷりと後ろ暮れぬし焚き火かな

ひく波の跡美しや桜貝

ゆたかなる苗代水の門邊なり

チチポポと鼓打たうよ花月夜 たかし

越後湯沢温泉で知り合った写生の大道を歩む歌人吉野秀雄から爽雨は写生の真髓を学ぶことになったのであった。吉野秀雄の爽雨句評を紹介する。

鳥屋トキそれて鳥屋それて鳥渡りけり

トヤ・トヤ・トリと揃った頭音も快適である。

残雪といへど一字の没しあり

「いへど」にわずかながら理がありそうでゐてしかも気にならぬのは、一句の調子におしきったところがあるからだ。

おのこゝの  
大沼小沼の小沼は木の芽の雨に見ず

一読しては、まことになだらかにO音の諧和をとげて

ある。

雪嶺に暈の触れゐて月は春  
何度も読んでみると、下五のハが調べを高揚させてゐるとに気づく。

十人の十三夜行木曾谷へ

寛濶(かつ)な句構へが好もしく、ジュウの音の重なりは耳に快い。⑤

以上が秀雄の爽雨俳句評である。

さわやかにおのが濁りをぬけし鯉

秋の季語「爽やか」の句である。戦争中の京都の苔寺での句であるという。濁りを抜け出した鯉に「おのが濁り」と詠んだ表現力、そして濁りから抜け出した姿に「爽やか」を感じ取る表現力、写生一筋に歩んだ俳人ならではのものである。

ただ立つに似てさび鮎を釣れりけり

昭和三十二年、鳥取の三朝温泉での作であるという。

爽雨は数々の著書の中で、「句帳はまだ早い」ということを述べている。風景、材料をよく見て、二、三日してから印象に残ったものを思い出して、十七音の形にまてていく。「寝かせる」というか「熟成させる」ということが大事であると述べている。鮎釣りの句も印象に残

った風景であつただろう。豪快な海釣りとは違つた雰圍  
気の鮎釣り、しかも秋というもの静かな雰圍気での、さ  
び鮎の釣り、「ただ立つに似て」という表現は熟成して  
からの表現ではなからうか。秋のさび鮎を釣る釣り人の  
印象から出て来たことばであろう。

萩刈りて萩の失せたるのみならず

一見して理解しにくい俳句である。庭の萩を刈つたあ  
との庭の風情が萩を刈つただけというのではなく何かを  
失っているというのである。このあたりが単なる写生を  
越えた境地の爽雨俳句というものである。爽雨の高弟  
である赤松恵子（昭和五十年度・句集「白毫」で俳人協  
会賞受賞）に同じような俳句がある。「鶴鳴きて月に一  
滴づつ金の 恵子」最初の句会で理解不明とした俳人が  
多かったそうである。刻々に夕方の白い月が金色を増し  
て来るというのである。爽雨俳句の写生の深みのあとを  
追つて行つた俳人が赤松恵子であろう。

小鳥焼くとぢし嘴より煙ほそく

昭和三十五年の作。爽雨独特の緻密な写生句である。  
吉野秀雄の昭和二十八年の著書に『短歌とは何か』があ  
るといふ。「わたしは人から写生とはどういふことかと  
訊かれれば、まづ一切の理窟をさしおいて、

一 正しく観ること

二 正しく感ずること

三 正しく表現すること

の三箇条を掲げ示すであらう」⑥という文章があるとい  
う。爽雨はこの写生の三箇条を作句の信条として提唱し  
てきた。爽雨には小鳥に関する俳句が割と多いが、この  
「小鳥焼く・」の句など、「一 正しく観ること」の  
典型ではなからうか。

万緑に朴また花を消すところ

昭和四十一年の作。「万緑」と「朴の花」、季重なり  
では、と言われるかもしれない。爽雨は、中心になつて  
いる季語があれば、他の季語が混じついても問題には  
ならないと言つている。ここでは「万緑」が中心となる  
季語。「朴」は単なる材料に過ぎない。「朴また花を消  
す」で、いくつかの朴の花が散つていった、そして、つ  
いには完璧な「万緑」になつていくだろう自然の推移を  
正しく感じ取つているのである。

背山より今かも飛雪寒牡丹

昭和四十六年の作。大和当麻の石光寺での句という。  
石光寺には爽雨のこの句碑がある。背山は悲劇の伝説の  
ある「二上山」であるという。この句も中心となる季語  
は、「寒牡丹」、「飛雪」は材料である。「背山」は爽  
雨の造語であると言われるが、「今かも飛雪」の中七は  
吉野秀雄の言う「二 正しく感ずること」であろう。

爽雨の弟子に三晃空調元社長の尾亀清四郎（おがめせ



いしろう)がいる。漢字の使い方に大変厳しい俳人で、朝日俳壇などへもかなり厳しい注文をしている。翔(しよう)を「翔(と)ぶ」と表現する俳人が多い。「飛ぶ」をなぜ使わないのか。「樽」と「桶」の混同、桶の中に何かを入れてあるのが、「樽」。何も入っていないのは「桶」。「女」を「ひと」と読む。そんなふりがなはない。「湖」を「うみ」と読む、こちらへんになると難しいところではあるが、吉野秀雄から学び、爽雨が提唱するところの「三 正しく表現すること」を弟子の尾亀清四郎は立派に受け継いでいるのである。

#### 門前の一路人來よ秋の暮れ

昭和五十年代前半の作である。爽雨のひらがなの使い方、易に表現する特色があった。平易と言っても、この「一路」などの表現も実は練り上げた挙げ句の結果の表現であるかもしれない。ただ簡単に出来たというものではない。

筆者は、昭和四十六年一月、二十四歳の折りに「隠岐雪解俳句会」に入会し、以後十八年の間、俳誌「雪解」主宰の皆吉爽雨の添削を仰いで来たが、最初の添削を忘れることが出来ない。

原句 水仙の野を見おろして孤舟あり

雅之

添削 水仙の丘に見おろし舟一つ

雅之

以上、皆吉爽雨の俳句を評してきた。

俳誌「雪解」の昭和五十五年三月号は四百号である。筆者は三十代半ばであったが、今一つ俳句に打ち込んでいなかった時期であった。「雪解」の選集のあとのほうに「選者の鑑賞」という欄があり、爽雨は一月号選集から、八句選んでいる。一句目は五句投句の巻頭四句の高弟、赤松恵子、二句目は一句欄にあった筆者の句であった。怠惰であった頃の筆者への励ましであったかと思うと胸が潰れる思いである。

#### 浜に来て破船に鳥秋の暮れ

日野 雅之(鳥根)

秋の暮方の浜辺に出てみると、そこに打ち上げられた難破船に一羽の鴉がとまっているのが目を引いたと言う。何げなく「浜に来て」といつているが、そのていねいなそぞろ言のあと、音感の高い「破船に鳥」がつづいて、はっと目にしたその印象を、ゆゆしく緊迫感として伝えている。

原句は「浜に出て」であったが、「浜に来て」と添削があった。ちなみに筆者は爽雨と会うことは一度もなかった。隠岐郡都万(つま)村那久(なぐ)地区から松江

商業学校（現・島根県立松江商業高校）に進学した安部房光（ふさみつ）は皆吉爽雨と同じ大阪の住友電線製造所に入社した。才気煥発の男で会社では「ボーコー君」と言つて人気者であつたらしい。俳人の大橋桜坡子もいたが、年齢の近い皆吉爽雨のほうが頼みやすかつたのであろう。隠岐の友人たちが俳句会をやっているらしいが、爽雨君、添削をしてくれないだろうか、というようなことであつたと思う。それが連綿と爽雨逝去まで続いたのである。

添削を頼んだ数年後、ボーコー君は爽雨に聞いた。

「那久の連中どうです。」「なかなか熱心だよ。」と爽雨の返事。数十年後、再び、ボーコー君は「那久の連中どうです。」爽雨は「相変わらず熱心でおまけに若い人達も多くなつたよ。」二人は深い感慨にふけつた、ということであつた。爽雨と那久の俳人の出会いについては那久の俳句会の一人であつた斎藤葉山（ようざん）の句集『木霊（こだま）』を息子であつた昭和四十年代の松江市長、斎藤強氏が出版した折、爽雨に序文を頼み、爽雨が那久の俳人との出会いのいきさつを以上のように述べている。

俳誌「雪解」では、句集で昭和五十年年度の俳人協会賞を受賞した爽雨の高弟、赤松恵子氏がおられるが、平成二十一年度の俳人協会評論賞を受賞した拙著「松江の俳人・大谷繞石・・・子規・漱石・ハーン・犀星をめぐつて」が、「雪解」同人で二度目の受賞であつた。冥界に

入られた師、爽雨への遅れた恩返しと僭越ながら思う次第である。

## 注

- ①「昭和俳句アルバム・皆吉爽雨の世界」（井沢正江編著・一九九一年六月五日・梅里書房刊）、四〇七頁。
- ②「第五折々のうた」（大岡信著・一九八六年三月二十日・岩波書店刊）四十二頁。
- ③「昭和俳句アルバム・皆吉爽雨の世界」（井沢正江編著・一九九一年六月五日・梅里書房刊）、十一〜十二頁。
- ④「昭和俳句アルバム・皆吉爽雨の世界」（井沢正江編著・一九九一年六月五日・梅里書房刊）、十四頁。
- ⑤「俳句への道」（皆吉爽雨著・昭和五十三年七月三十日・角川書店刊）、六十一〜六十三頁。
- ⑥「俳句への道」（皆吉爽雨著・昭和五十三年七月三十日・角川書店刊）、百四十四頁。